

ホルムスク追詠

林 宏 匡

妻逝きて再びの夏あかあか紅々と咲く百日紅せひつせふさへじ虚しく見つむ

あぢさゐの枯れ果てにける夏なつの日に稚わかきを尋とめてサハリンの旅

春風山はるかぜやまは如何なる露語つゆごによはるるか成育なりよくの地の山やまにしあれば

六十二年振りに訪らふ心躍り旅の支度のはかどらずなり

旅立たん吾へはなむけの百日紅花房増してにこやかかく見ゆ

稚き日の記憶を辿り待ち待ちし明日は出で発つサハリンの地へ

百日紅花咲き満つる季は来ぬ今ぞ出で発つ旅はサハリン

幼き日真夏の空を眺めぬて白き三日月田きを知りぬ

大鷲の啼き渡りける稚き日の夏の真岡は遠き日のこと

行潦こぼれひと日眺めて過すしたる幼き頃の母の面影

悲恋塚の伝へは沓し少年の心に深く刻まれしまま

たはむれに襦袢替へやりし弟も六十路なりしか旅樂しもよ

焼き立ての鰯じゅじゅーと音を立てて匂ふは鱈の白子味噌汁

じゅっじゅっと音を立ててゐし焼鰯夕餉くわ樂しく食すすみけり

花蜂は糸を曳きつつ逃げ去りぬわが丈を越す黄の花群をむら

白詰草の花咲く原に座りけり両手のひらは冷ゆる草生に

御手植の松のかたへに佇みて沿海州の影追ひし日よ

手井ていの浜硫黄焚火に肌寄せて紫海栗うにを焼べし匂ひよ

練干す架満たなたされて吹く風は間宮の海の潮の香を寄す

少年の憧憬乗せて大鷲は山越えにけり樺太の夏

真岡川に八つ目鰻を捕へむと遠足の夏の日の短かさよ

岩魚釣りて帰る沢道野兔の行方を追ひて日は暮れにけり

「のらへくろ」の本汚せしと誇られてなほ読まほしく借りにぞ行きし

輸送船轟沈されし沖合の赤き船底戦慄わななきて見き

敗戦に忠孝の夢断たれたる男の子虚うつろに海境を見つ

引き揚げむ真岡港みなとの朝霧に黒き軍艦ぬつと迫り来

朝霧に艦砲弾は頭を越えて悪魔の笛のごとき音ねを立つ

幾度いくたびも振り返りつつあてもなく砲火に追はれ群れにつきゆく

前線へ向かふ兵士に手を振りて遁がれゆくわれ少年を恥づ

父のみを砲火の街に残し来て母歩めぬと蹲うつくまりけり

蹲まる母を励まし背負ひしは退役軍人の成田さん頼もし

少年に軍靴は重し炎焰と燃ゆるわが街見かへりにつつ

砲声の絶えざる夜をはらからの名を呼び合ひてひた歩きけり

わが街の夜空赫々染まりつつ離りゆけども砲声絶えず

離りゆく街の炎の赤き夜の樺の樹影はつつつに怪し

貨車に乗りて豊原目ざす難民の少年として死を覚悟せる

ソ連機は低空飛行に貨車の上に爆音のみを落し去にけり

逸れぬ姉に遭ひたる嬉しさよ中野の井戸の水飲みに行けば

避難せし家に土足のソ連兵拳銃向けて物乞ひに来つ

赤鬼のごとき顔してソ連兵小銃担ぎ群れ通りけり

道の辺に群れて休めるソ連兵の睨みあるなか目を伏せて行きぬ

ヤポーニヤあ
日本人に生れて哀しむ少年に悼しかりきソ連戦車は

ソ連兵に黒パンの欠片を掌一杯貰ひて喰ひにきひもじき童べ

赤青の鸚哥を肩に秋日和カピタン・アレキサンの浅黒き顔

小子われ祖国に焦がれタタールの海境に輝る流水を見き

鈴生りの茱萸の枝束手持ち来し二股からの客いま何処

春風山聳ゆる麓に白き布振れる窓見ゆダスビダーニヤ

日航機垂直尾翼赤々と旅客を待てる夏来たりけり

蟬の如くゆるゆるゆるる函館の海にゆったり風に乗る鷗

浮雲の上を飛びゆく機の窓ゆ天つ日承くるわが身はひとつ

ホルムスクへ揺れ行くバスの道の辺に埃まみれの大路目立つ

草叢に立ちて見下ろすホルムスク六十二年前はまぼろし

砲弾を避けて伏せにし三宅坂拡張されて記憶埋もる

六十二年前の夕陽に立ち向かひ吾が少年期赤々と燃ゆ

六十二年振りに眺むるタターの海の彼方に没りゆく夕日

夕方の日光ひかげおろが拝み立ちつくすタターの海の夕茜雲

沈みゆく夕陽ひあかあか夏の海の童へ心の甦りつつ

夕闇のなか見はるかす丘の上に在りし真岡の影をもと尋めつ

海境に夕つ日沈みゆく時し杳き日の憶ひ込み上ぐるはも

海境の落暉まばゆき稚き日の記憶臙おぼろに曇り日の旅

大鷲の啼き渡りけるサハリンの山脈に原油ガス通すてふ

魚釣りに行きし溪流辿らむと訪ひしにあはれ六十二年経てば

真岡町王子製紙の工場の廢墟に立ちて飛燕見上ぐる

六十二年前を尋めてさまよへど真岡の町に追ふ影のなく

六十二年振りなつかしきホルムスク魚釣りし溪たにの跡形もなし

肥満にて杖つき歩く人あまたホルムスクの街にオルトペジアは

ガードマン夜をロビーに寝て守るホテル・チャイカの客は眇し

道沿ひの日本家屋は壞されて拵むげられにし坂の空しむし

あら草の茂れるままにふるさとは異国となりて蔭にもあらず

ドンガイを折りて齧^{かじ}りし遠き日の思ひ出閉ざし茂る虎杖^{いたどり}

ホルムスクの夏の旅路の曇り日に繁く飛び交ふ燕親しも

時々は「チチ」と鳴きつつ飛ぶ燕少年の日に聞きしその声

瘦せ雀^せ急き飛ぶ燕^{すす}煤け鳩変り果てたるわが真岡町

山桜並木伐られしこの坂は真岡神社の参道なりしを

石段は昔のままに在りしかど神社は失せてビルそびえ立つ

母と来て岸辺に芹を摘みたりし川狭まりて水音かそけし

失望は覚悟の上と訪らへる六十二年振りのホルムスク噫々

なぎさ辺に昆布を拾へる弟も爺ぢいと呼ばれるよはひる齡なりしか

拾ひ来し昆布に憶ひをめぐらせて羽母舞原野に囲むバーベキュー

浜梨は変らぬ色に咲けれども六十二年前の日々は還らず

女めの子こ山春風山よ旅人に真実まことの過去を伝え給へよ

佐藤さん佐々木さんとか呼びにつつつターの終日に加藤さんと知る

弟の差し出す鮭の燻製を何気なく取り噛みしむる旅

離岸せむ船のエンジンたかぶ昂おもれば愁おもひふるはすサハリンの旅

ゆつるりと「アインス・宗谷」船体を回し祖国へ舳みよしを匡ただす

停泊の船にも名残り惜しみつつ我が乗る船は岸を離るる

遠ざかるサハリン島に眼を凝らしまなぶた熱く浪の音を聴く

サハリンを去りゆく夏の薄ら日に水脈みひく船ゆ海の面を撮る

わが船とすれちがひたる漁舟いさぶね波にもまれて遠ざかりけり

漁舟ひとつ写して遠ざかるザリーフ・アニヴァに別れを告げつ

飛び交へる鷗いもに別れを惜しみつつ 舷ふなべりを打つ波の音にも

夏風に吹かれ離るるサハリンの海に再び来む日を誓ふ

清野さんの送り給ひしカセットは嗚乎「ふるさとは宗谷の果てに」

「ふるさとは宗谷の果てに」のテープ聴き沁々憶ふ冬の樺太

童心に橈を操りジャンプ台跳びて填はりぬ青き深雪みに

往診の父を馬櫓に待つわれに馭者は寒夜の星冴ゆるてふ

櫓曳きて荒き鼻息立てにつつ馬はバケツの水飲みつくす

降り積もる雪に家屋の軋む夜を寝ねがてに行きし厠の寒さ

山犬の遠吠え聞こゆ冬の夜の雪しんしんと降り積もるとき

櫓を曳く樺太犬の息づかひ吹雪の中を消えゆきにけり

追記 平成二十一年一月二十一日の読売新聞紙上に、「サハリン

日本人会会長の奈良博さんが一月二十日、交通事故による硬膜外血腫で死去した」と記されて居り目を疑った。ユー・ジノサハリンスクでの懇親会の際にお会いした時の温厚なお顔が想い出されます。未だ四十二歳の若さでした。人命の儚さが沁々身に伝えます。

合 掌